

日本について発信する英語教育

— 経済学部の学生の意識調査と授業実践例 —

堀 江 恭 子

はじめに

外国人と円滑なコミュニケーションをとるためには、語学力に加えて異文化を理解しそれに適応する能力を身に付けることが必須である。言語と文化は切り離せないもので、必然的に語学の授業にはその言語圏の文化について学ぶ内容も含まれる。しかしそもそもこの「異文化コミュニケーション能力」とは語学力や対象言語の文化を知ることだけを指すものではない。文部科学省が提唱するいわゆる「グローバル人材」育成のための英語教育改革にもそのことが意識されている。

「社会のグローバル化の進展への対応は、英語さえ習得すればよいということではない。我が国の歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とのコミュニケーションができればならない。」

（文部科学省『今後の英語教育の改善・充実方策についての報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』, 2014）

しかし上記の「我が国の歴史・文化等」に関する知識は膨大で深く、ましてその内容を英語で説明することは容易ではない。日本独特の文化や社会システム、歴史などについて知り、さらにそれを英語で説明するときに必要な単語・表現・適切な翻訳の仕方などを学ぶには長い時間と訓練を要する。今後社会に

出て国内外の仕事で異文化コミュニケーション能力を求められるであろう大学生には、日本についての理解・発信する力を英語の授業の中で時間をかけて養うことがますます必要になると考える。しかし具体的にどのようにこのテーマを授業に取り入れたらよいか等の指導案や大学教育向けのガイドラインは文部科学省から提示されておらず、指導法や授業プランは個々の教員が試行錯誤して考えていかなければならない。またこれまで英語圏の文化を中心に学習してきた日本の学生が、そもそも英語で日本について勉強することに興味があるのかという疑問もある。そこで本稿は英語の授業に日本についてのテーマを取り入れることの意義と課題を検討し、さらに大学生の意識調査の結果と授業の実践例を示してみたいと思う。

言語学習者が自国について知ることの意義

異文化コミュニケーションというと「相手の文化を理解する」ことだけが協調されがちであるが、改めてその定義を確認すると先述した自国の文化について知る重要性が見えてくる。Byram (1997) は自身が提唱する異文化コミュニケーションモデルの柱の一つに「知識」があることを挙げており、この知識とは「自分が属する社会的グループの中で社交を通して身に付け、自分の国とアイデンティティに見られる目立った特徴と対比させて表されるもの」(p.34)としている。つまり異文化とは自国で吸収した元々身に付けている知識や文化と比較して、その違いを認識するものだけということである。Brown (2000) もまた人が異文化に触れるときには、まず始めに自分が自国の文化にどれくらい影響を受けてきたのかを認識し、次に他者が異なる文化の影響を受けて培ってきた価値観や態度が自分のそれと違うことを理解する、というステップがあることを述べている。さらに Moran (2001) は言語学習者は異文化を自国の文化というレンズを通して見るので、すでに持っている知識に照らし合わせてその「異なるもの」に反応するとしている。このように異文化コミュニケーション能力を身に付けるには、他者との対比ができるようにまず自己の感覚やそれ

を育んだ文化について知ることが大前提だということがわかる。

日本の教育でも以前から上記の点が意識されてきたことが政府の教育策に見て取れる。進展する国際化にともなって日本が目指す教育方針を文部省が示した文書『我が国の文教施策 昭和63年度版』の中で、国際社会が「相互依存関係を維持発展させていくためには、諸国民同士の相互理解、特に、人々の生活や考え方で含めた広い意味での文化の相互理解が不可欠であり、同時に他文化を理解する土台として自らの文化を十分に理解している必要がある」と記している（文部省, 1988）。自国の文化についての知識・理解の必要性がこの時点で記されているが、この目標は2000年代に入りかつての「国際人」から「グローバル人材」と名前が変わっても引き継がれている。その明確な定義ははまだわかりにくいものの2012年に文部科学省は以下をグローバル人材を構成する3つの柱として打ち出している。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

（グローバル人材育成推進会議『グローバル人材育成戦略 審議まとめ』, 2012）

上記には国際的に活躍する人材の特徴として語学力、主体性などの資質、異文化理解に加えて「日本人としてのアイデンティティ」が含まれているが、この部分をより詳細に示した箇所が以下の『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』（2013）（小・中・高等学校対象）に見られる。

「日本文化の発信等やアイデンティティに関する教育の強化

- 東京オリンピック・パラリンピックに向け、児童生徒の英語による日本文化の発信、国際交流・ボランティア活動等の取り組みを強化
- 日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実（伝統文化・歴史の重

視等)」（p.1）

以上から、日本政府は国際舞台で躍進する人を育てる目標の中で、日本について発信することを英語力と同じくらい重視していることがわかる。また先述の異文化コミュニケーション本来の定義を鑑みると、今後特に社会に出る直前の大学英語教育において語学力・異文化理解力に加えて、自分や日本について知り英語で発信する能力を身に付ける機会を提供することは意義があると思われる。

学生の意識調査アンケート

それでは具体的なガイドラインが無い中で、どのようにこのテーマを授業に取り入れたらよいのだろうか。またこれまで英語圏の文化を中心に学習してきた日本の学生が、英語で日本について発信することについてどのように感じるだろうか。これらの疑問を探るべく、初めに英語の授業に日本についてのテーマを取り入れることに関する大学生の意識調査を行うことにした。

●実施環境

筆者が本務校の経済学部・現代ビジネス学科で担当する英語科目『経済専修英語（講読）Ⅱ』、『経済専修英語（講読）Ⅳ』、『経済専修英語（作文）Ⅱ』の履修学生合計72人を対象に実施した。2つの『経済専修英語（講読）』は基本的に同じ形式でⅡよりⅣの方が読む教材の難易度が高く、要求されることも多いが、これらの科目は3つとも2年生以上であれば英語の実力を問わず自由に履修できるため、授業内ではレベルの差が大きく見られる（基礎ができていない学生から留学に行く学生まで）。また種類の違う『経済専修英語』を2つ以上取ることもできるため、そのような学生には回答が重複しないようクラスでのみ答えることを求めた。現代ビジネス学科の科目ということで、国際的なビジネスの場を含めた幅広い環境での英語コミュニケーション力を高めること

を目標とするクラスとなっている。

● 質問内容

アンケートでは以下の3つの質問をした。

質問1. 自分の国について（例：文化など）英語で勉強してみたいと思いますか？
全く思わない あまり思わない まあまあ思う かなり思う すごく思う
（選択式）

質問2. 質問1で選んだ答えの理由

（記述式）

質問3. 具体的にどのような内容を勉強してみたいですか？ またどのような授業を望みますか？（上の質問1.で『まあまあ思う』『かなり思う』『すごく思う』を選んだ人のみ）

（記述式）

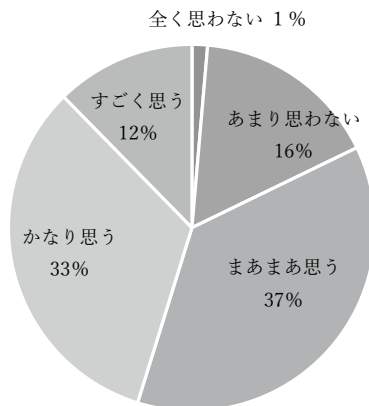
● 結果

〈質問1〉

グラフ1にまとめた結果から、自国の文化などのテーマを英語で勉強してみたいかについて全体の82%（『まあまあ思う』、『かなり思う』、『すごく思う』と回答）が少なくとも興味を持っていることがわかる。その内の半分（45%）が『かなり思う』か『すごく思う』と回答しており、高い関心をもつ学生もいることを示している。

グラフ 1

質問1. 自分の国について（例：文化など）英語で勉強してみたいと思いますか？



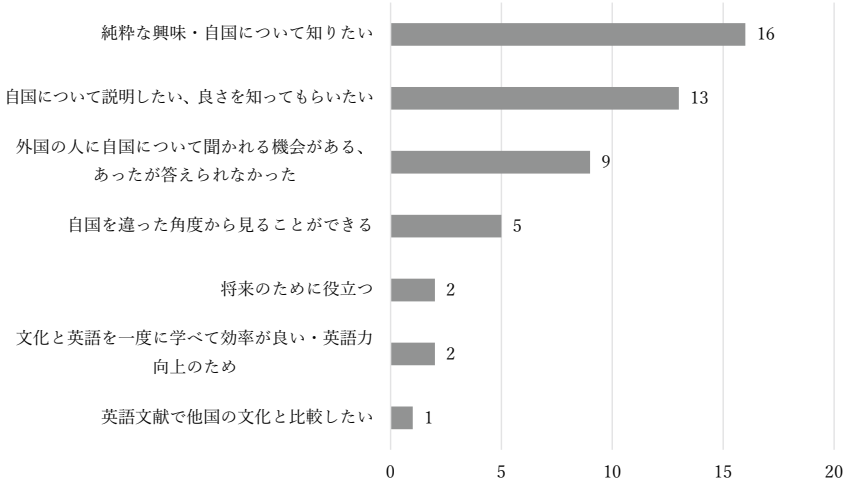
〈質問 2〉

質問 1 の答えを選んだ理由について、有効な回答のみ（無回答は除外）を分類した結果は以下である。

グラフ 2 は『まあまあ思う』『かなり思う』『すごく思う』を選択した学生の回答理由を分類したものである。最も多かったのは『純粋な興味・自国について知らないことがある』で、実際の記述の中には「英語でどのような表現になるのか知りたい」「自国について知らないことが多いと恥ずかしいので英語で学びたい」などの意見があり、これまでそのような機会が少なかったことをうかがわせる。次は『自国について説明したい、良さについて知ってほしい』、『外国の人に自国について聞かれる機会がある、あったが答えられなかった』が続き、将来的に外国の人に自国について説明する状況がある可能性を予測またはこれまでの体験から意識していることがわかる。その他は自国を違った角度から見る新鮮味、英語力の向上、他国文化との比較がしたいといった理由が挙げられた。

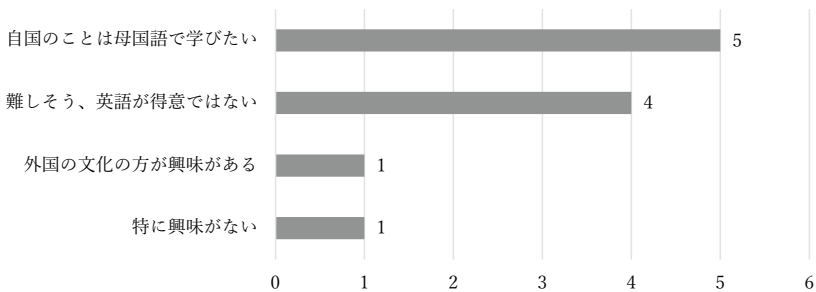
グラフ 2

質問 2. 質問 1 で『まあまあ思う』『かなり思う』『すごく思う』
を選んだ理由



グラフ 3

質問 2. 質問 1 で『あまり思わない』『全く思わない』を選んだ理由



グラフ 3 は『あまり思わない』『まったく思わない』を選じた学生が挙げた理由をまとめものである。最も多かったのは『自国のことは母国語で学びたい』で、具体的には「英語と文化の学習は分けた方が良いのでは」などの意見があった。続いて『難しそう、英語が得意ではない』が多く、英語に苦手意識

をもつ学生にとっては入りにくいトピックである可能性をうかがわせた。その他に『外国の文化の方が興味がある』と『特に興味がない』が各1名ずついた。

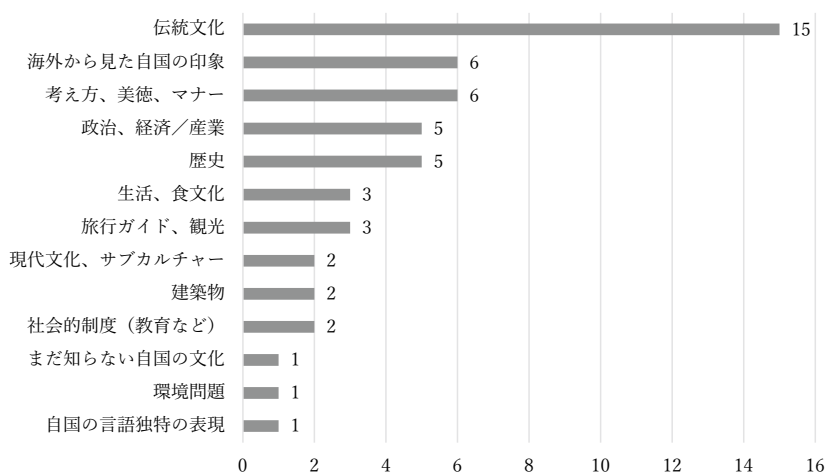
〈質問3〉

グラフ4は質問3で「どのような内容を勉強したいか」について得た記述回答を分類したものである。

この質問はこちらで限定せずに幅広い解答を得る目的で、あえて選択式ではなく記述式にして後からジャンル分けをした。具体的な例はほとんど挙げられなかったものの『伝統文化』の記述が最も多かった。これは政府が行った「文化に関する世論調査」(内閣府, 2016)の中の「世界に誇れる日本の文化は何か?」という問いで『伝統芸能』が一位だった結果に重なるものがある。次に『海外から見た自国の印象』と『考え方、美徳、マナー』が続き、さらに『政治、経済/産業』や『歴史』、『生活、食文化』など様々な答えがあった中、『現代文化、サブカルチャー』がかなり少ないことは事前の予想と違う結果となった。

グラフ4

質問3. 具体的にどのような内容を勉強してみたいですか？



漫画やアニメなどの現代文化は学生にとって親しみがあり他分野よりも入りやすい教材と思われたが、それよりも伝統的なことや他国から見た印象、自国独特の考え方などを学びたい学生が大きく上回った結果を見ると、自分が楽しんで勉強したいというよりも、将来的に外国の人とコミュニケーションを取ることを念頭に学びたい気持ちの表れとも捉えられる。

また質問3には同時に「具体的にどのような授業を望むか」という問いもあり、以下は得られた自由記述回答の内容をまとめたものである。

- ・文化と英語を半々くらいで学ぶ
- ・伝統文化を実践しながら学ぶ
- ・映像、演劇鑑賞を取り入れる
- ・そのトピックに関して説明をする会話訓練
- ・外国人留学生と日本人の混合グループでディスカッション
- ・グループごとに同じテーマについてプレゼンテーションし内容を比較する
- ・日本の文学や漫画を英語で読む
- ・他国の文化の比較しながら学ぶ

アンケート結果を参考にした授業づくり

今回のアンケートでは多くの学生が「英語で日本の文化について学んでみたい」と回答し、その理由は「純粋に知りたい」「日本のことを伝えたい」が半数を占めた。またもし実践するならば内容は「伝統文化」「海外から見た日本」「考え方、美德」などを学んでみたいとの声が多かった。また具体的な実践方法としては、ディスカッション、プレゼンテーション、外国との比較、会話訓練などの例があり、これらの結果を参考にしながら、経済学部の学生が履修する授業にどのようにこのテーマを盛り込めるかを考えることにした。以下はアンケート後に「経済専修英語（講読）」の授業で実践した内容の例である。このクラスは先述の通り現代ビジネスを学ぶ学生が履修するため、いずれ国内外のビジネスに携わる可能性を想定して、将来的に仕事上の異文化コミュニケー

ションの機会に役立てられるよう、アンケートの回答で「伝統文化」に次いで多かった「海外から見た日本」と「考え方、美德」のテーマに焦点を当てることにした。

教材の種類・トピック

1. 単発の記事

ニュース記事等を教材にする場合はなるべく経済やビジネスに関連があり、また多種多様な意見が出て議論の余地があるトピックを選ぶようにしている。以下は過去に扱ったトピック／教材の例と選択の理由である。

●日本人のコミュニケーションスタイル

'Non-verbal communication in Japanese business'

(Rochelle Kopp *Japan Intercultural Consulting*)

(内容：多文化環境でのビジネスを行う企業を文化研修プログラムなどでサポートするアメリカのコンサルティング会社の社長による記事で、日本人ビジネスマンと仕事をする際に頭に入れておくべき文化的な違いなどを指摘している。全てを言わず腹の内を察する文化、言語以外の要素（表情、間、声のトーンなど）が伝えるメッセージが多い文化などの例を挙げ、それらに具体的にどう対応するべきかを西洋人ビジネスマン対象に助言している。)

日本人相手に仕事をする外国のビジネスマンが仕事をスムーズに進めるための努力の一環として日本の文化を理解しようとしている内容を読み、学生自身も将来異文化環境で仕事をする機会がある場合に相手の文化に歩み寄る努力が必要だということを感じさせる目的でこの記事を取り上げた。

●ソフトパワー

‘Tokyo 2020 and Japan’s Soft Power’

(Yukari Easton August 31, 2016 *THE DIPLOMAT*)

(内容：過去に日本のソフトパワーを世界に発信する目的で日本政府が主導した「クールジャパン」プロジェクトが、今一つ影響力を持たなかったことを踏まえると、2020年東京オリンピックの開会式の演出は下手に政府や役人が指揮を執るより長年それを扱ってきた民間企業に任せるのが得策であり、プロの手に委ねることで日本のソフトパワーの威力を最大限に発揮することができるだろう、との意見が述べたもの。)

日本のサブカルチャーが海外で人気を博すようになって長いですが、このようなコンテンツを入口に日本に興味を持ち来日する外国人が多いことを学生はすでに良く知っている。自分たちにとっても身近で入りやすい分野であり、且つソフトパワーは日本の政治、経済などに影響を与えることを知るためにこの教材を選んだ。

●日本企業のものづくり精神

‘Recapturing *Monozukuri* in Toyota’s Manufacturing Ethos’

(Keivan Zokaei, Hunter Lovins, Andy Wood and Peter Hines March 11, 2014 *MIT Sloan Management Review*)

(内容：トヨタ自動車日本独特の「ものづくり精神」を柱に、社内の連携と人材育成に注力することでかつての強さを取り戻し、未来に向けてサステイナブルな製品を生み出そうとしている、というもの。)

日本の伝統的な「ものづくり精神」は職人などが携わる古くからの工芸品制作

だけではなく、現代のメーカーが製品を生み出す、またはチームワーク重視で作り上げる過程にも生きており、日本経済を支える強みの一つであることから現代ビジネス学科の学生向けに選んだテーマである。

2. テキスト

別の年には単発の記事ではなく、一年を通して日本がテーマのテキストを一冊使うことを試みた。リーディングテキストとして使用したのは Michael Pronko 他著『Inbound/Outbound Japan』（金星堂）で、日本に長く住む著者から見た社会や伝統、日本人とのコミュニケーションなどについて、西洋（主に母国アメリカ）の文化と比較しながら綴ったエッセイ集である。内容はあくまで一個人の体験を通して見た日本の印象が書かれているため、読後に日本人として自身や社会を省みて、著者の指摘に「確かにそういう部分があるかもしれない」「いや、個人差があり皆がそうであるとは思わない」など賛否両論が出て活発な議論ができそうだなと思ったのがテキスト選択の理由である。

授業の進め方

1. テーマの導入

先に述べたように、文化の違いを超えてコミュニケーションが取れるようになるためにはまず自分自身を育んだ文化について知ることが大切との理解から、このテーマの出発点として以下のような作業をすることにした。

●自分にとっての日本文化を確認する

学生は参考資料1の例にあるような色々な文化的項目に自分が考える日本または日本人の特徴や代表的な例を1人1人英語で記入した。その後ペアで話し合い、あとからクラス全体で内容を発表しあった。大半が同じ特徴や例を挙げる項目もあれば、人によって全く異なる考えや意外な答えが出るものもあるため、発表が大いに盛り上がる様子が見られた。またあくまで「自分にとっての

日本文化」なので、正解・不正解がないことから、ほぼクラスの全員が積極的に内容を発表するという活発な意見交換の機会となった。

この作業では、恐らく多くの学生が改めて日本について考える機会が少ないのではとの推測から、文化と一口に言っても幅広く捉え方や習慣が人によって異なるということを再認識するよう促した。学生一人一人が改めて自分自身の日本文化のイメージを確認する機会を持つことで、教材の内容を自分の認識と比較し、内省や批判的思考をしながら進めていくことを目的としている。

参考資料 1

Pre-reading worksheet

Give a feature or a representative example you can think of for each of Japanese culture.

Traditional arts		Gestures	
Architecture		Clothes	
Food		Family roles	
Dance, play		Age roles	
Literature		Gender roles	
Music		Concept of beauty	
Greetings		Concept of money	
Holiday customs		Values	
Religions		Communication style	
Personal space		Idea of your own	

2. 教材の読み方

導入で自分の考える日本について話し合ったあと、通常、教材を読む作業は以下のように進めている。

〈Pre-reading questions〉

教材の記事、もしくはテキストの各 Unit の内容について事前に考えさせる質問をいくつか用意する。例えば教材の一つ目で紹介した ‘Non-verbal communication in Japanese business’ の記事の場合、

1. Have you ever experienced a difficulty in communication?
With whom? How was it difficult (What happened)?
2. Can you think of any examples of differences between Japanese communication style and other culture's (countries') styles?

といった質問を考え意見交換をする。読む前から内容について意識、準備させることによって本文に入りやすくする。

〈Reading〉

・ Comprehension-check questions

本文は宿題として各自読み、事前に配布する内容理解問題に答えてくる。上記と同じ教材を例に見ると、

NON-VERBAL COMMUNICATION IN JAPANESE BUSINESS

1. How are Western communication style and Japanese communication style different?

Western communication style relies on _____.

Examples:

-
-
-

Japanese communication style relies less on _____ and more heavily on _____

Examples :

-
-
- … (抜粋)

などの質問を答える形で大筋をつかみ、授業内でまずはペアで話し合い、次にクラス全体で答えを確認する。テキストの場合も同様に、各 Unit にある内容理解問題やその他掲載されている Exercise をやる。

・ Summarizing the paragraphs

各ペアに一つか二つの段落を割り当て、その要旨を日本語（高いレベルのクラスでは英語）で発表させ、全体の流れを把握していく。この際に理解できなかった英語表現や文法事項なども話し合い、教員に質問をして細かい部分も同時に確認する。

・ Vocabulary/Translation

一語一句翻訳することはやらないが、以下のようなワークシートで単語やフレーズレベルで意味を確認する作業を行う。以下は ‘Tokyo 2020 and Japan’s Soft Power’ の記事を使った例である。

TOKYO 2020 and Japan’s Soft Power

■2016年リオオリンピックでの The Tokyo Show の内容：

2011年の地震と若い津波の _____ による ‘Thank you’ というオープニングメッセージののちに _____ ショーで東京オリンピックで競われる33種目が映し出された。しかし _____ をさらったのは、おなじみのキャラクターや日本のゲーム・漫画の主人公が登場した2分間のビデオプレゼンテーションだった。

ビデオの内容→ _____ ジャズバンドのサウンドトラックと“Shibuya 9:15”
 の見出しとともに、_____, _____, _____ なペースで始ま
 った。16歳の _____ が制服姿で日本の若者文化の _____ で有名な
 渋谷の _____ を上に高く舞い上がり、_____ が _____ と
 競争し、_____ が634mの東京スカイツリーの上を飛び越え、築
 1300年以上の浅草寺を _____ にして _____ が行われた。

… (抜粋)

全訳をやらずとも、単語の意味と文の構造を理解していないと穴埋めができないので良い練習になると思われる。また単語は自分で使って初めて定着するものなので、時間に余裕があれば重要な新出単語を一文に一つ使ってそれぞれがオリジナルの文章を作る作業もする。

〈Post-reading discussions〉

教材を読み終わったあとに一番大事なのは自分の意見やアイデアを他に伝える練習をすることであると考えるので、ペアまたはグループで用意された質問に答えてディスカッションを行う。ここで筆者が考える大きなポイントは『今後の予測』、『その是非』、『新しいアイデア』の3つである。

●今後の予測

「これからどうなっていくか」「形態は変わるのか今のままか」「今後起こりうる問題は何か」といった質問に答えることで少し先を予測する力は、これから社会に出る学生にとってどの分野で働くにしても大事な訓練と必要なスキルといえる。

- ・ Which Japanese culture do you think will be preserved and which might disappear in the future? Why?
- ・ What might be the strengths and weaknesses of 'monozukuri' style in Japan? In which areas do you think it would best develop?

(教材 'Recapturing *Monozukuri* in Toyota's Manufacturing Ethos' の例より)

●その是非

「その内容は正しいと思うか、または（一部）違う、全く間違っていると思うか」「今のやり方で良いのか」「どの点を改善するべきか、または維持するべきか」など日本独自のやり方を検証、または外国との比較を通して考える。

- ・ Do you agree with the writer's ideas on how Japanese people tend to communicate? (Do you think they are correct?) If yes, give some examples from your own experience (about yourself or people whom you know). If no, which point do you disagree with and why?

(教材 'Non-verbal communication in Japanese business' の例より)

●新しいアイデア

「どのような解決策が考えられるか」「新しくできること」など学生がオリジナルなアイデアを出す練習もディスカッションを活発にさせる。

- ・ Pick a country and imagine that you are hosting an event that introduces Japanese cultures there. Describe the content in detail and the reason for presenting it in that particular way.

(教材 'Tokyo 2020 and Japan's Soft Power' の例より)

これらの質問はディスカッションだけでなく文章に書いてレポートとして提出させても良い。

〈Presentations〉

より理解を深めるためにグループで授業内で扱ったトピックについて調べ直し、最終的にプレゼンテーション（英語）で今後の予測、その是非、新しいアイデアや問題解決法などさらに深掘りする形で発表し、互いに評価・コメントを書かせることもこのテーマのよいまとめとなる。

過去の発表例

- ・日本企業とアメリカ企業の広告宣伝の違い
- ・失われゆく日本の捕鯨文化 …など

日本についてのテーマを扱う際の課題—教員が留意すべき点

これまで英語の授業で日本に特化したテーマを取り上げた実践例を挙げてきたが、同時に気を付けなければいけない点もいくつかあることを指摘したい。

1. 偏見や先入観について

文化というものはその定義自体がどこまでの範囲や深さを指すかによって大きく変わる上に、時代によって新しく生まれ変化していく生き物とも言える。一般的に異文化について学ぶ教材を扱う際に頭に入れておかなければならないことは、ステレオタイプのイメージを学習者に植え付けてしまう危険性である。「この国の人たちは全員がこうだ」と偏った見方を植え付けたり、個々人の違いがあるという大前提を忘れてすることが無いように、教員は学生の理解のし方に注意を払わなくてはならない。では英語の授業で日本文化についてインプットする場合はどういう状況になるだろうか。内容は学生たちにとって馴染みのある、またはテーマとして入りやすい母国文化であるため、逆に自分たちの生活に照らし合わせて考えた場合「人や状況によるから一括りにできない」ということがよくわかり「これが日本文化だ」といった偏見は生まれにく

いと考えられる。例えばこれから日本で仕事をするアメリカ人ビジネスマン向けに日本人との関わり方のヒントを書いた教材を読むと、内容に「日本人はコミュニケーションをする際に表情・姿勢・声のトーンなどの非言語から得られる情報を重視する」「西洋人のように1から10まで話さないで察しなくてはいけない、わからなければ細かく質問して情報をとるべき」「矢継ぎ早に話さず間を大事にするべき」と書かれている。学生はこの内容についてどう感じるか問われると「確かにそういう部分があるかもしれない」という意見がある一方で、「人によって違う。自分は日本人だが思ったことを全部伝える方だ」「状況によって違う。仕事やアルバイトの現場など情報を漏らさず正確に伝えなくてはいけないケースはある」など多様な意見も出てくる。このように、自分が含まれているテーマだからこそ、それが全てではないことが即座にわかり偏見や先入観につながることはこの状況ではおこりにくいのではないかと考える。

一方で難しいのはアウトプットする側になった場合である。例えば外国の人に日本について文章または会話で説明する状況になった時、冒頭で紹介したような「日本はどうか？日本人は？」と問われた場合、代表として「日本はこうです」と一括りに紹介してしまうことが往々にしてある。対話する相手に偏った日本のイメージや日本人像を植え付けないためにも、発信するときには個人や状況によって違うという事実を踏まえ、あくまで自分個人の意見・自分が感じる日本や日本人の「傾向」として説明することを心掛けなくてはならないと教員は授業内で強調するべきである。

2. 外国語で扱うことの難しさ

文化を始めとしてその国や地域で独特の発展を遂げてきた固有のものを他言語で扱うことは難解である。英語の授業で日本についてのテーマを扱う場合、この言語的難しさはやはりインプットよりもアウトプットで際立つ傾向がある。リーディング・リスニングの素材として日本文化が出てきた場合、学生にとって他言語に翻訳された内容は多少の受け取りにくさがあるものの、背景知

識や親しみやすさに助けられて英語でも理解しやすいかもしれない。しかし、例えば日本の政治システム、天皇制、茶道の基本などの独特なトピックについて意見を述べたり説明をしたりする場合、知識としては知っていても英語でその内容をどのように表現するか、どの単語や言い回しを使えば的確に伝わるかを改めて学び訓練をしていなければ自然には出てこない。まして微妙なニュアンスや日本語にしかない英語に翻訳しづらい事柄について伝えるには事前の準備が必要である。このことを踏まえると授業の重点はアウトプットに据えるべきだと考える。教員が心掛けることは、まずインプットの段階で日本についての情報が英語でどのように翻訳されているか、具体的にはどのような単語や表現を使ってそれらが表されているかを学生に細かく確認させ、その上で、学んだ表現や訳し方を取り入れて自分の意見を書く・話す課題に取り組むなど日本について「発信する」訓練に多くの時間を割くべきだと考える。

総 括

これまでの日本の英語教育は欧米から学ぶことを軸に進められてきた印象があるが、これからは同時に国家レベルだけでなく個人でも英語を使って日本について発信していく時期に来ていると考える。そのような英語教育の変革は、グローバル人材育成計画をはじめとする政府主体の動きと同時に英語教員が各自で意識して授業の一部分にでも取り入れていけるものである。本稿ではそのような新しい視点から展開する授業に関しての学生の意見を調査し結果をまとめた。本アンケートの少ない対象人数では日本の大学生の意見を反映しているとは言い難いが、少なくともテーマとして求められている可能性、そして具体的にどのような授業内容を望んでいるかについて意見を収集できたことは一教員として収穫であった。またアンケート結果をもとに授業の進め方を紹介したが、その内容はほんの一案にすぎず、日本についてのテーマを扱う授業の展開のし方はより面白くオリジナリティ溢れるものが無数にあると想像する。今後はさらに情報を集め、授業案を作成・実践したのち学生の反応を再び調査し、

効果的な教材、トピック、アクティビティなどを検証することが課題である。

参考文献

- Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching*. (Fourth Edition). New York: Longman.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters. p.34.
- 中央教育審議会 (2002) 「新しい時代における教養教育の在り方について」『文部科学省ホームページ』2020年2月3日アクセス
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/001237.htm>
- Easton, Y. (2016). Tokyo 2020 and Japan's Soft Power. *THE DIPLOMAT*. Retrieved from <https://thediplomat.com/2016/08/tokyo-2020-and-japans-soft-power/>
- グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 審議まとめ」『首相官邸ホームページ』2018年8月23日アクセス
<<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>>
- Kopp, Rochelle. (n.d). Non-verbal communication in Japanese business. *Japan Intercultural Consulting*. Retrieved from <https://japanintercultural.com/free-resources/articles/non-verbal-communication-in-japanese-business/>
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』について』2019年9月30日アクセス
<https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf>
- 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策についての報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」『文部科学省ホームページ』2018年8月23日アクセス
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm>
- 文部省 (1988) 「我が国の文教施策 昭和63年度」『文部科学省ホームページ』2020年2月20日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198801/>
- Moran, P. R. (2001). *Teaching Culture*. Boston: HEINLE Cengage Learning.
- 内閣府 (2016) 「文化に関する世論調査」『内閣府ホームページ』2018年8月22日アクセス <<https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-bunka/index.html>>
- Pronko, M. (2020). *Inbound/Outbound Japan*. Tokyo: Kinseido.
- Zokaei, K., Lovins, H., Wood, A., & Hines, P. (2014). Recapturing *Monozukuri* in Toyota's Manufacturing Ethos. *MIT Sloan Management Review*. Retrieved from <https://sloanreview.mit.edu/article/recapturing-monozukuri-in-toyotas-manufacturing-ethos/>